

英語基本動詞の提示順序と方法  
— 中学校英語検定教科書における効果的な語彙指導 —

松久保 暁子

How Can Junior High School Textbooks Introduce English Verbs Effectively?

MATSUKUBO Akiko

桜美林大学

桜美林論考『言語文化研究』創刊号 2010年3月

The Journal of J. F. Oberlin University

Studies in Language and Culture, The First Issue, March 2010

キーワード：語彙習得、基本動詞、多義性、移動

## SUMMARY

How Can Junior High School Textbooks Introduce English Basic Verbs Effectively?

The purposes of this paper are (1) to analyze them in a textbook used in junior high schools in Japan and (2) to propose one of the effective approaches of introducing basic verbs with polysemy based on the analysis of semantic features of the basic verbs. In order to acquire productive knowledge of the basic verbs, this paper shows that the central meaning of the basic vocabulary should be taught at first. Also through the analysis of semantic features, this paper argues the importance of select words that should be taught in each stage of learning foreign languages.

## 1. はじめに

本論では、英語学習入門期<sup>1</sup>である中学校1年次から3年次の3年間に導入される移動を表す多義的な基本動詞<sup>2</sup>であるgoとtakeを考察対象とし、これらの動詞の意味的特徴をもとに、特に語の発表的知識を習得するために効果的な提示順序と方法の提案を試みる。

基本語彙を考察対象とした理由の1つには、基本語彙は使用頻度が高く、多義的な語が多いという意味特性にある。そのため基本語彙を使いこなすことができれば、多様な場面で幅広く表現することが可能だと考えられる。その一方で、これらの語は多義的であるがゆえに、母語の訳語を当てはめたり、訳語を暗記する学習方法には限界がある。さらにこのような学習方法だけでは発信に必要な語彙知識をするには十分ではない。また基本語彙の中でも動詞に焦点を当てた理由は、動詞は文の中で中心的な役割を果たしていること、そして動詞を使いこなすことは文の構造を理解することにもつながると考えたからである。また語彙指導の方法論を議論するのではなく、考察対象となる語が持つ意味的特徴を考察した上で、効果的な語彙指導を提案することが必須であると考えている。

そこで本論では、まずこれまで議論されてきた語彙知識について概観し、多義的な基本語彙の学習には、それら語が持つ中心義を理解する必要があることを明らかにする。そして語彙指導を提案するためには、日本の英語教育における語彙指導の位置づけ、また考察対象となる語が中学校英語検定教科書（以下、英語教科書と記す）においてどのような場面で、またどのような順序で導入されているのかを検討する必要がある。そのため、本論では、全国の中学校で最も多く採用されている英語教科書の1つである『New Crown』（以下、『NC』と記す）を考察対象として、日本の英語教育における語彙指導の現状を考察する。そして考察対象となる基本動詞の意味的特徴を考察した上で、それぞれの動詞の提示順序と方法を提案する。なお、本文中の下線は筆者によるものである。

## 2. 語彙知識と語彙選定

本論では語彙の発表的知識を習得するための効果的な語彙の提示方法と順序を提案していくが、まずその前提となる語彙知識であるreceptive knowledge（受容的知識）とproductive knowledge（発表的知識）を概観する。

Nation (1990) ではreceptive knowledge（受容的知識）を、ある語を聞いたり見たりするときに、その語を認識することができることを含む知識だとしている。その上で、語を発信するために必要となる知識、つまりproductive knowledge（発表的知識）について次のように述べている。

Productive knowledge of a word includes receptive knowledge and extends it. It involves knowing how to pronounce the word, how to write and spell it, how to use it in correct grammatical patterns along with the words it usually collocates with. Productive knowledge also involves not using the word too often if it is typically a low-frequency

word, and using it in suitable situation.

(Nation (1990: pp. 32-33))

このように Nation (1990) は、発表的知識は、語の受容的知識（受容するために必要な語の知識）を含み、またそれを拡張するものであり、その語を発音したり、書いたり、つづったり、よく共起する語とともに、正しい文法的な型 (grammatical pattern) の中で語を使うことも含まれると述べている。また発表的知識は、これらの知識に加えて、頻度の低い語をあまり使わないこと、そして頻度の低い語を適切な状況で使うことも含むと述べている。

そして Melka (1997) では、受容語彙と発表語彙が分けられて議論されていることが多いが、これらを明確に分けることができず、それぞれの適切な定義を見つけることはできないと指摘している。

Though estimate of receptive vocabulary versus productive vocabulary have been numerous, and though authors generally insist on a dichotomy between reception and production (hereafter R and P) in terms of lexicon, it is quite impossible to find clear and adequate definition of what is meant by reception and production. (Melka (1997: p. 84))

In analyzing the distance between R and P, it appeared that the distance between them, or the plane on which they operate, could be broken up into several stages: starting with imitation or reproduction without assimilation continuing with comprehension and reproduction with assimilation, and finishing with production. (Melka (1997: p. 99))

そのため、受容語彙と発表語彙は、連続体の端と端に存在すると考え、その間をいくつかの段階に分けることができるとしている。その段階をまとめると、次のような4段階になる。

1. “imitation or reproduction without assimilation”

(模倣、または同化を伴わない再生。つまり新しい知識が既存の知識に統合されないまま再生されること)

2. “comprehension” (理解)

3. “reproduction with assimilation”

(同化を伴った再生、つまり新出語彙が既に学習した知識と統合されて再生されること)

4. “production” (産出または発表)

1. は、聞いた語を真似て繰り返すことで、語と語が表す意味とが統合されていない段階である。2. は、語の意味を理解する段階であるため、読んだり聞いたりした語の意味を理解できる段階である。つまり語の受容的知識が身についた段階だと言える。そして3. は語

の意味を理解した上で、ある程度のヒントが与えられれば、既習語彙の知識と統合させて、その語を使える状況である。そして4. はあらゆる場面で、語を書いたり話したりすることが可能な段階である。つまり発表的知識を身につけた段階である。このように4の段階に至るまでは、1から3の段階を経ることになるため、受容的知識の習得よりも時間を要することになる。

## 2.1 発表的知識の習得

それでは発表的知識を得るために必要なのは何か。Laufer (1998) は、受容語彙と発表語彙の習得の度合いを調査するために、外国語として英語を6年間学習している高校2年生と、7年間学習している高校3年生を対象として、週5時間、計36週間にわたる語彙学習を実施し、Vocabulary Level Test<sup>3</sup>を行なった結果、受容語彙の習得には効果が見られたものの、発表語彙で用いられる語彙数には変化が見られなかったという結果を報告している。そしてLaufer (1998) ではこの調査結果をもとに、語彙習得について次のように述べている。

In our opinion, mere memorization of a word form in a given context without understanding the word's meaning cannot be called productive knowledge. If the learner can repeat the memorized word with its context in a test situation without understanding it, this is mechanical reproduction, not production. (Laufer (1998: p.257))

Laufer (1998) ではこのように語の意味を理解せずに、特定の文脈内での語形 (word form) を単に記憶しても、それは発表的知識を使えることにはならないとしている。学習者が語の意味を理解せずに、あるテストの場面で既に記憶された語を文脈の中で繰り返し使っても、それは機械的に再生しているだけであり、自ら産出していることにはならないと述べている。例えば試験のために語の意味を理解せず、単に暗記した語を再生し、繰り返し使うことができて、語そのものの意味を理解していなければ自ら伝えたいことを即座に伝えるということにはならない、ということである。このように発話に必要な語彙知識を獲得するためには、単に暗記した語を繰り返し使うことだけではなく、語が持つ意味を理解することが重要になると言える。

## 2.2 中心義の習得と語彙選定の必要性

前節では語の発表的知識を習得するためには、母語の訳語を暗記するだけでなく、その語の意味を理解する必要があることを述べた。そこで本節では語の中心義を理解することで、様々な場面で用いられる語の意味を理解することが可能になり、さらには発表的知識を得ることが可能になることを述べていく。特に本論で扱う多義的な語は、その語の中心義を理解することが必要だと考えられる。

そこで、まず中心義について概観することにする。本論では瀬戸編 (2007) による中心

義の概念を踏襲し、中心義から派生した意味を副意義と呼ぶことにする。

中心義とは、共時的な多義ネットワークの中心に位置する意義であり、その出発点となる意義である。中心義は (i) 文字通りの意義であり、(ii) 関係する他の意義を理解する上での前提となり、(iii) 具体性 (身体性) が高く、(iv) 認知されやすく、(v) 想起されやすい。また、(vi) 用法上の制約を受けにくい。それゆえ、(vii) 意義展開の出発点 (接点) となることがもつとも多い意義である。 (瀬戸編 (2007: p.4))

最近では、コア図式を用いて語の概念イメージを提示している英和辞典が登場し、特に多義語の語彙習得にとっては有益な方法だとされている。田中他編 (2003: p.iii) ではコアについて「コア (core meaning) とは、語の中核的意味や機能を表したものです。コアは、分断され分散していた意味記述に、意味展開の連続性を回復させ、読者に語の意味の全体像を示すことを意図とした教育的な工夫です」と述べている。また全ての語に対してコアを図で表現したコア図式が用いられているのではなく、「本来的に動作や空間関係に根ざした語」(田中他編 (2003: p.iii)) に対してコア図式が用いられている。本論で扱う移動を表す動詞は、コア図式で表すことができる動作や空間関係に根ざした語であり、さらに本論で扱う基本動詞は多義的であるため、コア図式のように個々の語の中心義と副意義とを分断することなく、図式で提示する方法は、効果的な語彙習得の提示方法だと考える。

それでは学習する全ての語の中心義を理解し、発展的知識を習得する必要があるのだろうか。Nation (1990: pp.32-33) では “Most native speakers cannot spell or pronounce all the words they are familiar with, and they are uncertain about the meaning and use of many of them.” というように、母語話者でさえも馴染みのある全ての語を綴ったり、発音することはできず、それらの多くの意味や使用についてはっきりとは知らないと言及している。さらに Nation (1990) では、英語母語者の受容語彙は発表語彙の2.2倍と言及している。すなわち、話したり書いたりする際に使用する語彙は、読んだり聞いたりする際の語彙の約半分だということになる。以上のことから、母語話者であっても読んだり聞いたりして理解できる全ての語を発話する際に使用しないということである。そのため、発表的知識を習得する対象となる語を選定することは妥当だと言える。

さらにこれらの語の中でも、先に挙げた田中他編 (2003: p.iii) がコア図式を用いて表すことができるとしている「動作や空間関係に根ざした語」に限定して中心義を提示することが、発表的知識を得るためには効果的だと考える。なぜならば、「4. 移動動詞の意味的特徴と配列順序」で詳しく述べるが、移動を表す基本動詞の場合、人間の最も基本的な動作であるために、他の動詞と比べるとその中心義を理解することは容易ではないかと考えるからである。

### 3. 日本の英語教育における語彙指導

基本動詞の提示方法、提示順序を提案するにあたり、中学校の英語教育における語彙指導を考察する必要がある。本章では、まずその指針となる学習指導要領における語彙指導の位置づけを概観し、考察対象となる英語教科書の語彙を考察する。

#### 3.1 学習指導要領における語彙指導の位置づけ

現行の中学校指導要領（平成15年12月26日に一部改訂、以下、指導要領と記す）では、ゆとりある教育の展開のために、外国語の内容をできるだけスリム化することを目指し、総語彙数を従前の指導要領から1000語減らして、900語程度としている。

また、指導要領の別表1で提示される必ず習うべき基本語となる語彙は、平成元年に公示された従前の指導要領では507語だったが、現行では100語となっている。そしてこの100語の基本語以外に使用する語彙は、教科書会社の裁量によって決められている。

指導要領では基本語の個々の品詞は記載されていないが、そのほとんどは前置詞、冠詞、接続詞、助動詞、疑問詞などの機能語（function word）<sup>4</sup>であり、基本語に含まれている本動詞は、be動詞（am, are, is）とhaveのみである。doとhaveも基本的に含まれているが、先に述べたように個々の語の品詞が記載されていないため、これらが本動詞なのか助動詞なのかは明確でない。しかし考察対象となる『NC』では、haveを基本語に含まれる本動詞としているため、本論でもhaveを本動詞として考察する。

教材については、「3 指導計画の作成と内容の取扱い」の中で次のように述べられている。

教材は、英語での実践的コミュニケーション能力を育成するため、実際の言語の使用場面や言語の働きに十分配慮したものを取り上げるものとする。その際、英語を使用している人々を中心とする世界の人々及び日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、歴史などに関するもののうちから、生徒の心身の発達段階及び興味・関心に即して適切な題材を変化をもたせて取り上げるものとし、次の観点に配慮する必要がある。（平成10年『中学校学習指導要領』）

そして、第1学年の語彙指導については、「学習段階を考慮した指導上の配慮事項」という項目の中で、「・・・身近な言語の使用場面や言語の働きに配慮した言語活動を行わせること。その際、自分の気持ちや身の回りのできごとなどの中から簡単な表現を用いてコミュニケーションを図れるような話題を取り上げること。」（平成10年『中学校学習指導要領』）と記載されているように、生徒の身近な言語の使用場面が可能になるような言語活動が実現できるように、学校の身近なもの、生活に密接に関わる語が使用されている。

このように現行の教科書では、生徒が興味を持つような身近な場面で身の回りのことを表したり、自分の気持ち表現できるかどうか、また世界の人々の生活、風俗習慣等に関連しているかということが語の選定基準となっている。しかしながら、現行の指導要領では体系



的な語彙指導を念頭においた、具体的かつ明確な語彙の選定基準が示されていないと言えよう。

さらに平成20年3月28日に告示され、平成21年度から移行措置が開始される新学習指導要領では、総語彙数を1,200語程度という語数のみが提示されるだけで、別表1で示されている基本語リストもなくなるため、扱われる語彙が多様化すると予測される。

また、英語教科書の配列順序は文法中心となっており、文法項目の導入に応じて、語彙が選定されている。岡監(1999: p.483)では「文法構造の方が語彙より教育的に選択しやすく、配列しやすい」と指摘している。『NC』の中で見られる「Word Corner」のように、語彙学習を中心とした箇所はあるものの、全体的には文法事項によって配列が決められており、語彙学習が付随的学習(incidental learning)となる構成になっている。また学習者のニーズによって、語彙の選定基準は変わるはずであり、全ての学習者に対して、同一の語彙を選定するのは不可能だと言えよう。しかしながら、それぞれの学習段階において、語彙指導の目標を明確にし、その目標にあわせた語彙選択の基準を設けることが、外国語の指導には重要であると言える。

### 3.2 英語教科書で使用されている語彙

実際に英語教科書ではどのような語が用いられているのか。ここでは、『NC』で扱われている語彙数、また語彙の選定基準を概観する(以下『NC1』は1年生、『NC2』は2年生、『NC3』は3年生が使用するテキストを表す)。

『NC』における語彙の選定について、三省堂HPでは次のように説明されている。

・・・英英辞典の頻度ランクのほか、英検での出現率、NEW CROWN以外も含めた主要教科書での出現率、中学生学習者コーパスでの出現率などもあわせて検討し、語彙を精選しています。中学校で扱う単語は900語程度とされているため、使用頻度が高く応用しやすい語を精選する必要があります。(『New Crown』Q&A)

このように、『NC』では使用頻度をもとに、英検や他の教科書の出現率も配慮して選定されているようである。このように指導要領で定められている基本語以外の語は教科書会社の方針によって決められていることがわかる。

『NC』では、語彙を「基本語」、「理解語」、「話題語」の3つに分類している。「基本語」は、話したり書いたりできることを目指す語とし、その中には指導要領の別表1の基本語100語が含まれている。このように基本語は、先に挙げた発表的知識を習得すべき語彙に対応すると考えられる。「理解語」は理解できることを目指す語、そして「話題語」は特定の教材との関連で意味がわかればよい語として分類されている。

各学年の「基本語」、「理解語」、「話題語」の異なり語数と使用されている動詞の異なり語数をまとめたのが表1である<sup>5</sup>。なお、( )内は、使用されている動詞の異なり語数を示す。



	『NC 1』	『NC 2』	『NC 3』	計
(1) 基本語※	293 (47)	149 (36)	58 (16)	500 (99)
(2) 理解語	144 (21)	131 (44)	139 (38)	414 (103)
(3) 話題語	59 (0)	63 (4)	81 (8)	203 (12)
合計	496 (68)	343 (84)	278 (62)	1,117 (214)

表1：『NC』の各学年の使用語彙数と動詞の数<sup>6</sup> ※別表1の基本語100語を含む。

表1「『NC』の各学年の使用語彙数と動詞の数」から、1年生から3年生で使用される語彙の約44%が1年生で導入され、さらに基本語においては全体の約60%が1年生で導入されていることがわかる。このことから、英語学習入門期の最初の段階である中学校1年生での語彙指導が重要だと言えよう。

#### 4. 移動動詞の意味的特徴と配列順序

本章では考察対象となる移動を表す動詞の典型である go と、物の移動を表す take の意味的特徴を明らかにし、その意味的特徴をもとに英語教科書におけるそれぞれの動詞の提示方法と提示順序を考察する。

移動について、田中・松本（1997: p.128）では「移動とは時間の経過に伴って起こる物体の位置の変化」とし、「多くの言語学者が指摘するように、移動の表現（あるいは空間表現一般）は言語表現の中でも最も基本的なものの1つである。」と述べている。また、小野（2007: p.142）では、『移動する』ものは人間に、また人間が作った物質、組織、金融等にも起こる現象で、いわば、生活全般にわたって見られるものである。そのため、移動を表す典型的な go, come はまさに基本的な語彙であり、多くの比喩的な表現に使われる。」と述べている。

このように移動を表す動詞は、我々の最も基本的な動作を示すと同時に、目に見える動作を表す。そのため、これらの中心義を習得し、かつそこから派生した意味を理解することで、母語の訳語を暗記する方法に頼らず、発表的知識を得ることが可能だと考える。そして、人間の最も基本的な動作を表すことから、これらの動詞の中心義をはじめに導入し、そこから派生する副意義を導入することが体系的な語彙指導につながるのではないだろうか。

##### 4.1 go の意味的特徴

瀬戸編（2007）では、go の中心義を「話し手がいる場所または話し手の視点がある場所から出ていく」（瀬戸編（2007: p.416））としている。中心義を表す例文の一部を挙げる<sup>7</sup>。

(4.1.a) Oh, it's late; I have to be going.

(4.1.b) Let's go back to the hotel.

(4.1.c) In the silence, the elevator went down slowly.

(4.1.d) We went to buy drinks.

(4.1.e) He went shopping [dancing] with me.

(4.1.f) Shall we go for a drink tonight?

(瀬戸編 (2007: p.416))

(4.1b) は目的地である the hotel が明示されているが、その他の例では目的語は明示されていない。(4.1.c) はエレベーターが降下して止まった階、(4.1.d) は飲み物が売られている場所、(4.1.e) は買い物またはダンスをする場所、(4.1.f) はお酒が飲める場所が目的地だと推測できる。しかし (4.1.a) の場合、その会話がなされている状況がわかれば、目的地を推測できるかもしれないが、この文だけでは目的地を推測することはできず、話し手がいるところから出て行く移動のみを表している。つまり (4.1.b) のように、目的地に視点が置かれる場合は、不変化詞<sup>8</sup> を伴って目的地を明示させている一方で、話し手がいるところから出て行くという移動のみを表す場合は、目的地が明示されていない。つまり目的地が明示されていない (4.1.b) 以外の例文は、目的地よりも移動に焦点が当てられていると考えられる。

田中・松本 (1999: p.126) では、「経路とは、移動の開始地点から終了地点まで移動物が通る地点のすべてを結んだものである。したがって、経路には出発点、通過点 (通過部分)、着点がある」とした上で、「このうち、実際の言語表現においては情報上重要な地点のみを言語化するのが普通である。」(田中・松本 (1997: p.126)) と説明している。この経路を図にすると、図1のようになる。

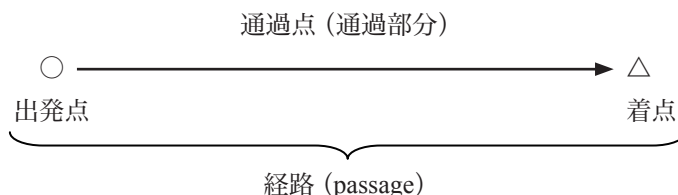


図1：経路 (passage)

このように go の中心義である「話し手がいる場所または話し手の視点がある場所から出て行く」という移動に加えて、目的地に焦点が当てられる場合は不変化詞を伴って目的地が言語化される。また移動そのものに焦点が当てられる場合は、目的地は言語化されず、移動の方向を表す不変化詞、または不変化詞を伴わない場合もある。また go は移動を表す leave や pass と比べると、様々な不変化詞と共起することが可能である<sup>9</sup>。

相沢 (2007: p.138) では Ogden の Basic English<sup>10</sup> をもとに、go と不変化詞との結びつきによって表される意味の広がりをも、図2「go と方位詞の組み合わせ」のように表している。

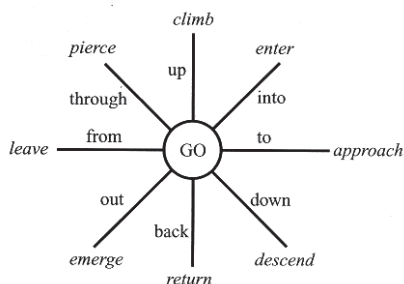


図2：goと方位詞の組み合わせ (相沢 (2007: p.138))

例えば、go upの場合、climbが既習得語彙でなくてもgoと方位詞<sup>11</sup> upを用いてclimbが表す意味を示すことができるとしている。しかし、go upにはclimbが持つ「(人が) 手足を使って登る」(瀬戸 (2007: p.182)) という意味が含まれていないため、go upはclimbが持つ意味のすべてを表すことはできない。

(4.1.g) The temperature has climbed steadily since this morning.

(4.1.h) The divorce rate had climbed to almost 30% of all marriages.

(4.1.i) The song climbed to number 2 in the US charts. (LDOCE, s.v. climb)

(4.1.g) は気温、(4.1.h) は離婚率、(4.1.i) は歌の売り上げといった数値の上昇を表している。これらの例で用いられているclimbは、中心義に含まれる「手足を使って」という意味要素が消えて、物理的な上昇を表す副意義を表している。

一方、go upは次の例文に見られるように、空間的、物理的な上昇に加え、(2) 建物が建つ [build]、(3) 叫ぶ、歓声を上げる [shout, cheer]、(4) 炎上する [explode, burn] といった副意義を表す。

(4.1.j) A great cheer went up from the audience. [shout, cheer]

(4.1.k) He had left the gas on and the whole kitchen went up. [explode, burn]

(LDOCE, s.v. go)

(4.1.j) のgoは「〈人・物 (の声・音) などが (話し手の場とは無関係に) 〉向こうへ行く」(瀬戸 (2007: p.417)) という副意義を表す。言い換えると、「声が伝わる」という意味を表す。また共起する不変化詞 upの中心義は「(低い下の位置から) 高い上の位置へ」(瀬戸 (2007: p.1026)) である。そして (4.1.j) のupは、この中心義から派生した「(物事が) 意識にあがって:(目に) 見えて、現れて、起こって」という副意義を表す。つまり (4.1.j) はgoが表す「声が伝わる」という意味と、upの「出現」という意味が合わさって「大きな歓声が沸き起こる」という意味を表す。

(4.1.k) のgoは「〈人・物などが〉(話し手の場所から) 出る」、(瀬戸 (2007: p.416)) という意味を表す。そしてupは、先に挙げた中心義「(低い下の位置から) 高い上の位置へ」、つまり炎が燃え上がることを表しているため、キッチンに炎が燃え上がり、そしてキッチンが話し手の場所から出る、つまり焼失することを表していることがわかる。このように、goと不変化詞upの2語が共起することで、climbが表す空間的、物理的な上昇と比べると、幅広い意味を表すことがわかる。このようなgoの意味的特徴から、移動を表す動詞を導入する際は、様々な不変化詞と共起して幅広い意味を表すgoをまず始めに導入することが妥当と言えよう。

## 4.2 goの配列順序

それでは、goが教科書ではどのような順序で、そしてどのような文で用いられているのか。資料1「『New Crown 1-3』で使用されている go と takeの文」は『NC1』から『NC3』でgoが用いられている文のリストである。資料1から『NC1』から『NC3』で用いられているgoを見ると、全て「話し手がいる場所または話し手の視点がある場所から出ていく」(瀬戸編 (2007: p.416)) という中心義を表していることがわかる。そして、(2) Let's go.、(19) Ken, where would you like to go?、(22) Ratna, where do you want to go? 以外は、先に挙げた経路 (passage) を表す不変化詞と共に用いられている。特に『NC1』から『NC3』の文の多くが、不変化詞 toを伴って目的地までの移動を示している。またto以外では“down, back, away, along, into, up”といった方向や位置を表す不変化詞と共起している。

考察対象である『NC』で導入されているように、goの中心義を初めて提示する際には「話し手がいる場所」がわかり、その場所から離れるという移動を示す例文を最初に提示するのが効果的であると考えられる。さらにgoは先に述べたように、不変化詞と共起することで、幅広い意味を表すことができる。そのため、特に英語学習入門期においては、go + 不変化詞を体系的に、つまり学習者の理解を手助けできるように、不変化詞で表された方位への移動をわかりやく提示される必要がある。

一方、“For here or to go?” という文でgoが初出する英語教科書も見受けられた。ハンバーガーショップでハンバーガーを注文する場面で提示されているが、このgoについて、OALDで“(AmE, informal) if you buy cooked food to go in a restaurant or shop/store, you buy it to take away and eat somewhere else: Two pizzas to go.” (OALD, s.v. go) と説明しているように、特にアメリカ英語で見られる形式ばらない状況で用いられる表現で、テイクアウトができるレストランや店という限られた場面で用いられる。そしてこの‘go’には中心義である移動に加えて、レストランやお店で物を購入するという意味になり、副意義を表している。

“For here or to go?” はレストランや店などで頻繁に用いられる文であるが、これはある特定の場面でのみ用いられる文である。そして副意義を表すgoが初出すると、訳語に頼った学習方法にならざるを得ないのではないか。そのため、まずgoの中心義を理解した上で、

このような文を提示し、使用される場面から「食べ物を買って、その場から出ていく」という意味を推測する方法が効果的な学習ではないか。

『初級クラウン英和辞典』は、中学生から使用することが可能な辞書である。この辞書ではgoを次のイラストを用いて説明している。

go

**動** 行く

◎話し手、あるいは話し手の視点を置いている場所から遠ざかること

**基本** go to London ロンドンへ行く → go to + 名詞



(『初級クラウン』、s.v. go)

このように、話し手が今いるところから出ていくというgoの中心義、そして目的地を示すto Londonも示されており、現在いるところから目的地であるロンドンへの移動を、イラストを用いてわかりやすく説明されている。入門期の教科書の中でも、図やイラストで説明がしやすい移動を表す基本動詞の中心義を、このように視覚に訴える方法で提示することは可能ではないだろうか。

### 4.3 takeの意味的特徴

takeはほとんどの場合他動詞として用いられ、目的語で示されたものの移動を示すため、本論では移動を表す動詞とする。“I forgot to take my bag with me when I got off the bus.” (OALD, s.v. take) の例に見られるように、takeの中心義は「〈人が〉〈物などを〉手でつかみ取る」(瀬戸 (2007: p.963)) で、そこから主体のところに取り込む、さらにつかんだものを移動させる、という意味が生まれてくる。そして「手で物をつかみとる」という身体的動作から、“We’ll take your offer kindly.” という例に見られるように、目的語が手に取ることができる物質的なものではなく、申し出、責任を受け入れるという意味へ派生する。

Stubb (2001) では、脱語彙化された (delexicalization) 動詞<sup>12</sup> の一つとしてtakeを挙げている。takeについて “There were over 400 examples, but in only about 10 per cent of these did TAKE have a literal meaning of ‘grasp with the hand’ or ‘transport’ .” (Stubbs (2001: p.21)) というように、takeがliteral meaning (文字通りの意味)、つまり本論でいう中心義に相当する「手でつかむ」または「運ぶ」という意味が使われているのが、400例を超える中で、たった10%に過ぎないと述べている。代表的な脱語彙化された動詞は、give, have, make, takeで、意味は主に動詞の後に続く名詞によって意味が表され、これらの動詞は時制や数、相など

を表す文法的役割を果たすとされている。しかしこれらの動詞が文中において、意味を表す役割を全く担っていないということではない。

(4.3.a) Would you like to take a look?

(4.3.b) Mike's just taking a shower.

(4.3.c) Sara took a deep breath. (LDOCE, s.v. take)

(4.3.a) か (4.3.c) の take は先に挙げた中心義から「〈人が〉〈行動を〉自分のものとして取り込む」という意味へと派生した意味を表す。確かに (4.3.a) は「ちょっと見る」、(4.3.b) は「シャワーを浴びる」、(4.3.b) は「深呼吸をする」というように、take の後に続く名詞が意味を表す役割を担っているが、take は名詞によって表された行動、行為を「自分のものとして取り込む」という意味を表しているため、take の中心義が保たれていると言える。(4.3.a) から (4.3.c) の take を仮に give に置き換えることができないことも、take の中心義が保たれていることを証明している。

#### 4.4 take の配列順序

資料1『New Crown 1-3』で使用されている go と take の文から、take が用いられている文を (1) take a picture (photo)、(2) I'll take it.、(3) take care of、(4) take the train / bus、(5) take the seat の5つに分類することができる。これらの文は、take の中心義である「〈人が〉〈物などを〉手でつかみ取る」を表していない。つまり『NC1-3』では、中心義から派生した副意義を表す take が用いられている。その要因として、先に挙げた Stubb (2001) の指摘からわかるように、take が文字通り、つまり中心義を表すために使用される頻度が少ないことが考えられる。

上記の (1) から (5) の take の目的語は、手で掴み取ったり、取り込む物や人ではない。(1) の場合は「写す対象」、そして (3) は「care が表す行為」である。そして (2) は店頭で商品を購入するというように金銭を払って商品を取り込む、つまり商品を選んで買うという意味を表す。(5) は座席という場所を自分のものとして取り込む、つまり座席を占める、席に着くという意味を表す。このように take を導入する際、副意義を表す文が用いられると、学習者は take の中心義である「手で何かをつかむ」を理解せず、例えば “take care of” = 「世話をする」といったように母語の訳語に頼ってしまう恐れがある。

付録として掲載されている「単語の意味」では take を次のように説明している。



『NC 1』	『NC 2』	『NC 3』
<b>take: 動</b> 1. (写真) をとる。 2. (乗り物) に乗る。	<b>take: 動</b> 1. (もの) を買う。 - I'll <i>take</i> it. 2. (ある行動) をとる、をする。 We must <i>take</i> care of them. 3. (写真) をとる。 - <i>take</i> a picture 4. (乗り物) にのる。 <i>take care of</i> ～ ～の世話をする。	<b>take: 動</b> 1. (乗り物) に乗る。 <i>Take</i> the train. 2. (人が席などに) 着く、すわる。 3. (写真) をとる。 4. (もの) を買う。 - I'll <i>take</i> it. 5. (ある行動) をとる、する。 <i>take a seat</i> 席につく。 <i>take a picture[photo]</i> 写真をとる。

表2:『NC』付録における take の説明

このように、それぞれの例に対する日本語訳が記載されているが、take の中心義から副意義へと派生する連続性を理解することなく、母語の対訳によって分断された意味が羅列されている。そのため、これらの日本語訳を暗記するという訳語に頼った学習が習慣付けられてしまうのではないかと考えられる。そして「2. 語彙知識」で挙げた Melka (1997) の語彙習得の過程に当てはめて考えてみると、母語の訳語を暗記する学習方法では、訳語を当てはめることによって文の意味は理解ができるものの、その語の意味を理解し、そしてそれを production (産出または発表) することは困難だと考えられる。そのため特に本論で扱う go や take のような多義的な基本動詞は、その語の本質的な意味、つまり中心義を十分に理解した上で、その副意義を提示し、それらの意味のつながりを提示することが可能だと考えられる。先にも挙げた『初級クラウン』では、次のような例やイラストを用いて、take の中心義を提示している。

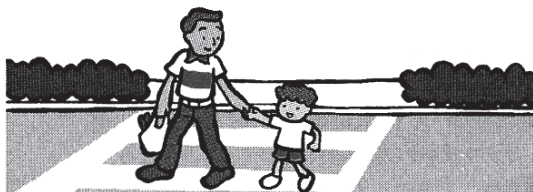
take

**動** 取る；持って行く、連れて行く

(乗り物に) 乗る

(時間などが) とる；かかる

① (手に) 取る、つかむ；(手に取って) 持っていく、連れていく。



(『初級クラウン』、s.v. take)

この場合、掴み取るものが目に見えるものであること、また学習者自身が自らの身体を使って take が表す動作をすぐに実践できることから、take の中心義を提示するための最適な用例であろう。

## 5. 結論

外国語における語彙学習について、McCathy (1990: p.viii) は、学習者が学習対象となる言語の文法や音声を十分に学習し、身につけたとしても、幅広い意味を表現するための語を身につけなければ、第二言語における意味のあるコミュニケーションが発生しないと述べている。さらに、語彙学習の重要性を指摘した上で、外国語学習に必要なあらゆる側面の中でも、語彙学習は最も体系化されておらず、そして学習者に十分に提供されていないと指摘している。

No matter how well the student learns grammar, no matter how successfully the sounds of L2 are mastered, without words to express a wide range of meaning, communication in an L2 just cannot happen in any meaningful way. And yet vocabulary often seems to be the least systematized and the least well catered for of all the aspects of learning a foreign language.  
(McCathy (1990: p. viii))

本論では、多義的な移動を表す基本動詞の中でも、goとtakeを考察対象し、これらの意味的特徴を踏まえた上で、それぞれの動詞の中心義から導入することを提案した。そしてgo＋不変化詞という2語によって幅広い意味を表すことから、中心義である移動に加えて移動の方向や方位を表す不変化詞と共に導入する必要性を明らかにした。またtakeの場合、まず初めに目に見える物を目的語に対応させ、中心義を十分に理解した上で、take care ofに見られるような副意義を提示する必要があると述べた。このように、それぞれの動詞の意味的特徴によって、効果的に習得する方法を提案することが可能であると言える。

英語学習入門期となる中学1年生から3年生の間で、語の中心義を提示することはかえって学習者の負担になる恐れもある。そして上記のMcCathy (1998) の指摘にある通り、語彙学習は未だに体系化されておらず、その指導方法も確立していない。筆者は語彙学習に重要な時期である入門期に母語の訳語に頼った学習方法を身につけてしまうと、発信するために必要な語彙知識を習得することが難しいと考えている。とりわけこのような学習方法では、本論で扱った多義的な基本動詞を使いこなすことが困難になると考える。そのため入門期においては学習者の負担を軽減するためにも、中心義を理解する必要がある語彙を選定する必要があると考えられる。さらに、語彙は入門期だけではなく、外国語を学習する中で絶えず学習しなくてはならないため、それぞれの学習の過程によって、語彙の学習方法が変わる必要があろう。本論では、まず移動を表す動詞から導入することを提案したが、今後はその語彙の選定基準を明確にし、さらにそれぞれの語彙の意味的特徴を踏まえた上で、体系的な語彙指導を提案していきたい。

## 注

- (1) 平成19年度の小学校英語活動実施状況調査によると、全国の公立小学校の約97.1%で英語活動が実施されている状況から、中学校3年間を英語学習の入門期とするのが妥当かどうか判断が難しい。しかし、本論では学習指導要領に基づいたカリキュラム、そして検定教科書を用いた英語学習が始まる中学校から本格的に英語学習が始まると考える。さらに本論では英語教科書で用いられている語を分析対象とするため、英語教科書を用いている中学校からの英語教育を英語学習入門期として論を進める。
- (2) 基本動詞は基本語彙の一部である。基本語彙 (basic vocabulary) は “The minimum number of lexical items in a language usually chosen for pedagogical purposes (e.g. the minimum vocabulary for second language learners or the spelling vocabulary for native-speaking pupils at a certain educational level).” (Bussmann (1990: p.49)) というようにある言語の中で、たいてい教育的目的のために選ばれた最小の語彙目録と定義されている。これまで様々な基本語彙リストが開発されてきたが、本論では、Longman Definition Vocabulary を基本語彙とする。この定義語 (definition word) は、*A General Service List of English Words* を元に作成され、さらに約4億語からなりあっている Longman Corpus Network のデータをもとに、使用頻度によって選定された語で、現在ではこの定義語2,000語が、基本語彙として広く認知されている。詳細については、松久保 (2009) を参照。
- (3) このテストは、300-400語という字数制限を設け、“Should a government be allowed to limit the number of children in family?” といったテーマに基づく自由作文で語彙数を図る方法で実施されている。
- (4) 機能語 (function word) は、A term sometimes used in word classification for a word whose largely or wholly grammatical, e.g. ARTICLE, PRONOUNS, CONJUNCTIONS. (Crystal (1997: p.162)) と定義されている。“largely or wholly” と説明されているように、全ての側面で文法的であるとは限らず、文中では内容語 (content word) の役割を果たす可能性があることを示唆している。
- (5) 表1『NC』各学年の語彙数は、『New Crown』編集部から研究を目的として提供していただいた学年別語彙一覧のデータをもとに算出したものである。
- (6) 動詞の数には、助動詞は含まれていない。
- (7) goの意味派生については、松久保 (2004) を参照。OEDによると、“... it (i.e. go) had formerly a special application to *walking* as distinguished from other modes of progression; ...” (goはかつては進行を表す他の動作と区別するために、“walking”の意味に対応した) と述べている。そして、goを “To walk; to move or travel on one's feet (opposed to *creep, fly, ride, swim, etc.*) ; to move on foot at an ordinary pace (opposed to run, etc.) .” と説明している。このように、goは他の動作を表す動詞 (creep, fly, ride, swim) と徒歩での移動を区別とを区別するために用いられていたことがわかる。
- (8) ここでは前置詞と副詞を区別せず、Quirk et al. (1985) に基づきこれらを不変化詞 (particle) と呼ぶことにする。
- (9) 詳細については、松久保 (2009) を参照。
- (10) Basic English は自己表現を可能にするための、少数の語のリストである。また使用頻度ではなく、世界中の人々が英語で日常的な伝達ができるために必要な850語を選択している。この850語を組み合わせることによって、日常のあらゆる場面や目的で、全てのことを伝達可能であることを目指して作られたリストである。この語彙制限に対しては反発が多いと言われているが、共通語としての英語が必須となっている今日では、このように意思伝達できる最低限の語彙を習得する

ことは有益であると考えられる。また、一般的に動詞と呼ばれているものをoperator (操作詞) と呼び、be, do, have, go, come, get, give, put, take, make, keep, let, seem, say, see, send の16語を操作詞としている。operator と呼ばれるこれらの動詞は、文の中では語彙的というよりも、機能的な働きをしている。つまり共に用いられる語彙を操作し、正しい文構造を作る働きをしている。

(11) 相沢 (2007) に基づき、ここでは方向や位置を示す不変化詞を「方位詞」と呼ぶことにする。

(12) 本論では脱語彙化について詳しく扱わないが、これらの動詞はlight verb (Jespersen (1942))、やempty very (Allerton (1982)) と呼ばれることもある。

## 参考文献

- 相沢佳子. 2007. 『850語に魅せられた天才C.K. オグデン』東京：北星堂.
- Bussmann, Hadumod. 1990. *Routledge Dictionary of Language and Linguistics*. New York: Routledge.
- Crystal, David. 1997. *A Dictionary of Linguistics and Phonetics*. Fourth edition. Oxford: Blackwell Publishers.
- Laufer, Batia. 1997. "What's in a word that makes it hard or easy: some intralexical factors that affect the learning of words." In *Vocabulary: Description, Acquisition and Pedagogy* by Schmitt, Norbert and Michael McCarthy, eds. Cambridge: Cambridge University Press.
- 松久保暁子. 2004. 「移動を表す動詞の意味派生に関する一考察 ― goを中心に―」『文体論研究』第48号. 東京：日本文体論学会.
- . 2009. 「英語基本動詞の考察 ― 語彙習得の視点から―」『英語学英語教育研究』第14巻、28号. 神奈川：日本英語教育英学会.
- McCarthy, Michael. 1990. *Vocabulary*. Oxford: Oxford University Press.
- Melka, Francine. 1997. "Receptive vs. Productive Aspect of Vocabulary." In *Vocabulary: Description, Acquisition and Pedagogy* by Schmitt, Norbert and Michael McCarthy, eds. Cambridge: Cambridge University Press.
- Nation, I.S.P. 1990. *Teaching and Learning Vocabulary*. Boston: Heinle & Heinle Publishers.
- 岡秀夫 (監訳). 1999. 『外国語教育学大辞典』東京：大修館書店.
- 小野経男. 2007. 『英語類義動詞の構文事典』東京：大修館書店.
- Quirk Randolph, et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Stubbs, Michael. 2001. *Words and Phrases: Corpus Studies of Lexical Semantics*. Oxford: Blackwell Publishers.
- 田中茂範・松本曜. 1997. 『空間と移動の表現』(日英語比較選書 6) 東京：研究社出版.

## 辞書類

- 瀬戸賢一 (編). 2007. 『英語多義ネットワーク事典』東京：小学館.
- Simpson, J. A. et al., eds. 1989. *The Oxford English Dictionary Online*. Second edition. Oxford: Clarendon Press. (OED)
- Summers, D. et al., eds. 2005. *Longman Dictionary of Contemporary English*. Fourth edition. Harlow: Pearson Education Limited. (LDOCE)
- 田島伸悟 (編). 2008. 『初級クラウン英和辞典』第11版. 東京：三省堂. (『初級クラウン』)

田中茂範他(編). 2003. 『Eゲイト英和辞典』東京:ベネッセコーポレーション.

Wehweine, S, ed. 2000. *Oxford Advanced Learners Dictionary of Current English*. Oxford: Oxford University Press. (OALD)

### その他(学習指導要領、教科書等)

文部科学省. 『中学校学習指導要領』(平成10年12月告示)

文部科学省. 『中学校学習指導要領』(平成20年3月告示)

文部科学省. 『中学校学習指導要領解説 外国語編』(平成20年7月)

斉藤栄二他. 2008. 『NEW CROWN 1 English Series』New Edition. 東京:三省堂.

———. 2008. 『NEW CROWN 2 English Series』New Edition. 東京:三省堂.

———. 2008. 『NEW CROWN 3 English Series』New Edition. 東京:三省堂.

三省堂. 「New Crown Q&A」(三省堂書店 ホームページ)

([http://tb.sanseido.co.jp/english/newcrown/18\\_qa/18\\_qa-c1.html#5](http://tb.sanseido.co.jp/english/newcrown/18_qa/18_qa-c1.html#5))

### 資料1 『New Crown 1-3』で使用されている go と take の文

#### 1. go

##### 『NC 1』(第1学年)

No	項目	用例
1	L5	Do you sometimes <u>go</u> to Okinawa?
2	DIT 4	At 3:15. Let's <u>go</u> .
3	L9	Last Saturday I <u>went</u> to a forest near my house.
4	DIW 2	I <u>went</u> to Hokkaido with my family.
5	LR2	Alice <u>went</u> down the hole.
6		Did she <u>go</u> to the center of the earth?
7		No, she didn't. She <u>went</u> to a strange place.
8		She <u>went</u> to Wonderland.

##### 『NC 2』(第2学年)

9	L1	My uncle <u>went</u> to Sydney last week. He stayed for five days.
10	L3	Will they <u>go</u> back to the wild?
11	DIW 2	I'm <u>going</u> away for two days.
12	WC 4	I <u>went</u> to the library.
13	LR 2	One rainy night Zorba and Lucky <u>went</u> to a tall tower.

##### 『NC 3』(第3学年)

14	DIT 1	<u>Go</u> along the street to the bank.
15	L3	Today I <u>went</u> to the Beijing opera, "Journey to the West".
16		You <u>went</u> to the Great Wall, didn't you?
17	LR 1	Later Kahu <u>went</u> into the sea.
18		Kahu <u>went</u> up to the old whale and said, "Come, Father. You must live. We must live."
19	L5	Ken, where would like to <u>go</u> ?

20		I'd like to <u>go</u> to Mongolia.
21		Also, I want to <u>go</u> to the Naadam Festival.
22		Ratna, where do you want to <u>go</u> ?
23		I want to <u>go</u> to the Guiana Highlands in South America.
24		I want to visit Mina and <u>go</u> to a samulnori concert with her.
25	L7	Kevin Carter <u>went</u> there to work as a photographer.
26	L8	Last week I <u>went</u> to a movie.
27	LR 2	Like most Japanese junior high school students, you come to school every day and <u>go</u> home after school.
28	LR 2	But many children in other countries cannot <u>go</u> to school.
29		Some teachers are working in schools for refugee children who cannot <u>go</u> to school.
30		They have the right to live with their families, the right to <u>go</u> to school in peace, and the right to grow up in safety.

## 2. take

### 『NC 1』(第1学年)

No	項目	用例
1	L4	<u>Take</u> a picture.

### 『NC 2』(第2学年)

2	DIT 4	I'll <u>take</u> it.
3	L5	We must <u>take</u> care of them.
4	LR 2	Please <u>take</u> care of the egg.
5		<u>Taking</u> care of the egg was difficult.
6		Zorba and his friends <u>took</u> care of Lucky.

### 『NC 3』(第3学年)

7	DIT 3	<u>Take</u> the train for Hon-machi.
8	L6	Mrs Parks was a black woman who always <u>took</u> the bus home from work.
9		One day she <u>took</u> a seat near the white section.
10		Finally, they won the right to <u>take</u> any seat on buses.
11	L7	He <u>took</u> this photo.
12		Even a simple action, like <u>taking</u> a photo, can have two sides.

## 項目の省略名

- L = Lesson (本文)  
 DIT = Do It Talk (話す活動を深く学習する)  
 DIW = Do It Write (書く活動を深く学習する)  
 LR = Let's Read (読む活動を深く学習する)  
 WC = Word Corner (いろいろな単語をまとめて学習する)